

# 育脳寺子屋NEWS

2020.10.1

(お子さんが大人になったとき、社会で活躍できるヒントがいっぱい)

## 幕末の天才思想家、吉田松陰の教え

～育脳寺子屋の思いと重なる言葉の数々～



鎖国の真ただ中の日本。

そんなある日、日本に転機が訪れます。1853年、ペリーの黒船来航です。

ペリーは圧倒的技術力の差を見せ開国させようと、日本に向け威嚇発射で大砲を三発撃ち込みます。「刀で大砲に勝てるわけがない・・・」と沈黙しきっていた江戸幕府の中、西洋を追い抜いてやろうと意気込んでいる1人の若者がいました。

その人の名は吉田松陰、25歳。

はじめは西洋の倒し方を必死で考えていた松陰でしたが、今のままでは我々はどうも勝てないという結論に至ります。そこで松陰は発想を変えます。

「いくら敵意を燃やしたって、日本を守ることができないのであれば、むしろ外国のやり方を学んだ方がいい！」

鎖国中に海外渡航などすればもちろん死刑になります。しかし、松陰はそんなことは気にしませんでした。

翌年再び黒船がやってきた時、松陰は小舟を盗み荒波の中を漕ぎ出していき、そのまま黒船の甲板に乗り込み「学ばせてくれ！！」と頼んだのでした。しかし密航で捕まった松陰は、牢獄の中に入れられてしまいます。(しかし松陰のこの覚悟と行動力が、後に明治維新という大きな波を生むこととなるのです)

松陰は仮釈放された後、松下村という小さな村で塾を始めました。

下級武士のこどもが集まる小さな塾に教科書はなく、まともな校舎もありませんでした。そこで教科書は夜を徹して弟子と一緒に書き写し、校舎も弟子たちと手作りで10畳と8畳の最低限のものを作りました。

しょうかそんじゆく

これが後に伝説となる「松下村塾」です。

松下村塾はのちに、高杉晋作や伊藤博文（初代総理）、山縣有朋（第3・9第総理）、品川弥二郎（内務大臣）、山田顕義（國學院大學と日本大学の創設者）など、結果的に総理大臣2名、国務大臣7名、大学の創設者2名というとてつもない数のエリートを世に送り込んだのです。

松陰はなぜこんな教育ができたのか？彼はこう語りました。

「いかに生きるかという志さえ立たせることができれば、  
人生そのものが学問に変わり、あとは生徒が勝手に学んでくれる」

松陰はその行動力や向こう見ずな性格が災いし、30歳で短い生涯を終えることとなりますが、松下村塾の弟子たちや彼の意思を継いだ武士たちが史上最大の改革である明治維新をおこし、今に至る豊かな近代国家を造り上げたのです。

「教育は知識だけを伝えても意味はない」

今の時代に言われているようなことを、彼はすでに幕末の頃に唱えていました。とてつもない数のエリートを育てた松陰が、知識を伝えるより大切にしたこと、また彼の残した言葉とは果たしてどのようなものだったのでしょうか。そこには育脳寺子屋の思いと重なる部分が大いにありました。

# 知識だけを増やしても意味が無い！

みなさんが勉強をするのには、どのような目的があるのでしょうか。  
テストで良い点数を取るため？それとも知識を増やすためでしょうか？

## 物事には「本質」と「枝葉」がある

幕末の頃、総理大臣や国務大臣、大学の創設者など多くのエリートを  
生み出した「松下村塾」という小さな塾がありました。その塾で先生を  
していたのが吉田松陰でした。松陰は次のように言っていたそうです。

「いくら知識だけを増やしても意味が無い。」

物事には本質と枝葉がある。この本質の部分が重要なのだ。」

枝葉とは知識のこと、本質とは「どう生きたいのか」という志の部分な  
のです。この本質の部分が無ければ、どれだけ素晴らしい本を読んでも、  
どれだけ素晴らしい話を聞いても、知識が増えたというだけで、人生の  
根本的な役には立っていないということなのです。

「学ぶ」ということは、人に評価してもらうためにするものではありません。  
「こういう人になるために学ぼう」という志を持つようになれば、  
学んだ知識は全て役立つものになるのです。さて、あなたは将来どのよ  
うな人になりたいですか？一度じっくり考えてみてくださいね。



「誰かに評価されるための学問ではなく、  
「こういう人になるために学ぼう」というのが目標」

吉田松陰 ～幕末の天才思想家であり教育者～

自分の部屋の目立つところに貼って、読み返すようにしましょう。